

〔課題演習報告〕

中学校における学力向上検証改善サイクルの確立に関する研究 ー教科学力向上プランシートをもとにした教科部会のマネジメントを通してー

安 部 祐 子

Yuko ABE

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻学校運営リーダーコース
糸島市立前原東中学校

(2020 年 1 月 6 日受理)

本研究は、中学校における教科部会の学力向上のためのPDCAサイクルを具現化するマネジメントを通して、教科部会の年間計画、テスト作成や授業の改善を促し、学力向上に向けた取組を確立する方策を明らかにすることを目的としている。まず初めに、教科部会で、生徒の実態と目指す生徒像を教員間で共有するため、教科学力向上プランシートを作成した。PDCAサイクルに沿った学力向上の全体研修の実施、時間割編成における教科部会の会議時間の設定、教科部会の計画的実施、各学期考查テストや市内共通テストへの対応、学力獲得に向けた授業づくり等について話し合い、組織的に学力向上に取り組んだ。結果として、教科学力向上プランシートをもとにした教科部会のマネジメントが、学力向上検証改善サイクルの確立に一定の効果があつた。

キーワード：学力向上，中学校，教科部会のマネジメント，教科学力向上プランシート

1 主題設定の理由

(1) 学力に関する国や県の動向から

文部科学省は、平成19年度『学力調査の結果に基づく検証改善サイクルの確立に向けた実践研究』として、都道府県・政令指定都市ごとに設置された検証改善委員会に対する委託研究事業を実施した。同事業では、学校改善支援プランの作成を中心とした「学校改善支援プラン作成等事業」、学校改善支援プランとして優れた取組を支援する「学校改善支援促進事業」を展開しているが、これらが「検証改善サイクル（通称）」として全国的に定着している。

福岡県においては、平成30年度の「福岡県教育施策実施計画(平成30年3月)」を策定し、平成28年度の全国学力・学習状況調査の結果から、中学校の学力を課題と指摘し、「確かな学力向上のための取組の推進」施策を提示している。その1つとして、「県内全小・中学校における学力実態、学習状

況、及び市町村の学力向上の取組状況を調査する」とし、「学力向上に係る効果的な検証改善サイクルの確立を推進する」としている。

この「学力」の指標となるのが「学力テスト（の得点）」である。県内公立中学校では、①学期毎の中間・期末考查、②民間業者テスト、③全国学力・学習状況調査、④福岡県学力調査等、多様な「学力テスト」が実施されている。質的にも異なる評価指標が用いられている。中学校の現況は、学校教育に求められる「学力（観）」が多分化している中で、それらを教員間で価値共有できていない課題が存在する。それぞれのテストで結果を求められるが、「学力テスト」間のデータを十分に活用できていないという課題がある。

このような課題が存在することは、全国学力・学習状況調査調査が開始されて10年が経過した現在でも、依然として、「検証改善サイクル」の更なる確立が繰り返し提起されていることから明らかである。学力向上に向けた「検証改善（PDCA）サイクル」をどのように確立するのかを実証的にさ

らに研究していく必要がある。

(2) 糸島市、在籍校の実態から

福岡県教育施策の提言を受けて、糸島市でも学力向上プランの取組が展開している。糸島市教育委員会では、学力分析の徹底及び改善サイクルの機能化、教員の参画意欲等を、学校の組織力向上の課題として挙げ、解決のための方策の1つとして、「学力向上を推進するPDCAサイクルの確実な実施と効果検証の徹底を図る」ことを掲げている。

また、糸島市内の各中学校（全6中学校）の教科代表者から構成されている「糸島市教科等研究協議会」が中心となって、平成30年度より、定期考査のいくつかの教科で糸島市6中学校の「共通問題」を作成、実施している。糸島市全体で課題を共有し、生徒の学力向上を図る取組であり、令和元年度は2学期の期末考査5教科（国語・社会・数学・理科・英語）で「共通問題」の作成、実施をしている。特に数学科部会は、平成29年度から、生徒が「数学的な見方・考え方を発揮しながら「主体的・対話的で深い学び」を実現できるようにするために、効果的な単元の構成方法の開発とその評価基準の設定のしかた（評価問題の在り方）を研究してきた。平成30年度には、「共通問題」を作成する過程で、思考力・判断力・表現力を問う記述式問題を作成するための視点とその方法を部会員で共有できたという成果があった。

在籍校は、学級数23学級（特別支援学級4クラスを含む）の中規模校である。全国学力・学習状況調査の平均正答率は、平成30年度の結果、B問題では国語、数学ともに全国の平均正答率を若干上回っている。一方で、国語、数学ともにA問題が全国の平均正答率を若干下回っており、基礎・基本が定着していない。令和元年度「知識」と「活用」が一体的に構成された調査では、数学で全国の平均正答率を少し下回っている。これまでも調査の結果を受け、研究部を中心に、調査問題を使った校内研修や定期考査にB問題を取り入れて思考力・判断力・表現力を分析する取組等を行ってきた。1年次の研究では2学期期末考査の「共通問題」の取組を校内で継続するために数学科の教科部会を実施した。3学期の単元で、評価問題（C段階）を過去の全国学力・学習状況調査問題に設定したPDCAサイクルを回し、授業改善の方向性を教科部会で共有できたという成果があった。国語や数学は毎年の調査問題があり、評価問題の視点を共有しやすいが、数年毎実施される教科や調査がない教科では、教科部会で評価の視点や目指す生徒像を共有する場を意図的に設定する必要がある。

(3) 先行研究から

検証改善サイクルの確立に向けて、全国の教育委員会や教育センターを中心に、調査研究が行われ、その取組が紹介されている。福岡県教育センターでは、平成29年度調査研究「実効性のある検証改善サイクルによる学力向上」において、検証改善サイクルを充実させるために、授業改善の取組を連続・発展させることで継続的な実践ができるよう、小さなサイクルを回し続けるモデルを提示している。そのサイクルを機能させるためのポイントの1つに「C段階を充実する」ことが挙げられている。C段階は教科部会に設定されており、C（評価）を重視することが授業改善につながり、生徒の学力向上の実効性を高めるとしている。

これらのことから、教科担任制で指導する中学校においては、教科部会で評価問題を分析し、それをもとに授業改善をするPDCAサイクルを回していくが必要になる。そのためには、改善の視点や生徒の目指す姿を共有するシートを活用した組織的な教科部会のマネジメントが必要であると考えた。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「学力向上検証改善サイクルの確立」とは

本研究では、学力を、定期考査（糸島市共通問題を含む）の結果で判断することとした。定期考査問題が授業内容を反映している一方で、それらが他の学力テストの成果につながることで、相乗効果が図られる。定期考査が有効に機能することで指導と評価の一体化を図ることができる。

学力向上検証改善サイクルとは、学力向上に係る日頃の授業改善をねらいとしたもので学力調査やテストの分析をもとに、PDCAサイクルで授業改善を図る。本研究では、教師が分析をもとにしたテスト作成の改善や授業改善が行われた姿を、学力向上検証改善サイクルの確立した姿とする。

(2) 「数科学力向上プランシート」とは

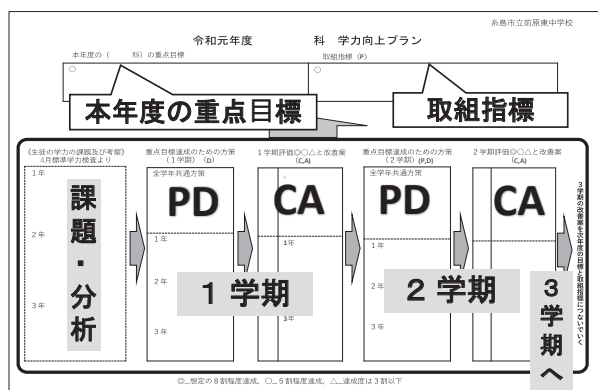


図1 数科学力向上プランシート

教科学力向上プランシートとは、生徒の実態分析をもとに、教科の目標やそれを達成するための指標を示し、学期ごとに評価し改善していくためのシートである（図1）。

(3)「教科部会のマネジメント」とは

教科部会とは、各教科担当教員の集まりのことであり、生徒の目指す姿を共有し、各種調査やアンケート分析結果をもとに、テスト作成や単元計画の作成を行う会である。

本研究では定期テストで測れる学力の向上を目指していくので、5教科（国語、社会、数学、理科、英語）の部会と主に連携していく（図2）。

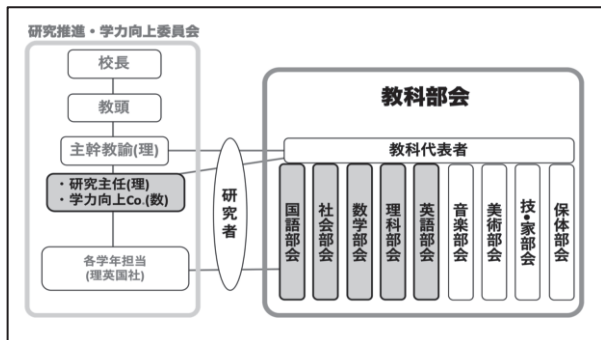


図2 教科部会の組織図

学力向上検証改善サイクルを中心となって回していくのが研究推進・学力向上委員会の研究主任と学力向上Co.である。

教科部会のマネジメントとは、管理職、主幹教諭、研究主任、学力向上Co.と連携し、教科部会に働きかけ、教科部会のPDCAサイクルを活性化し授業改善やテスト作成の改善を行っていくことである（図3）。

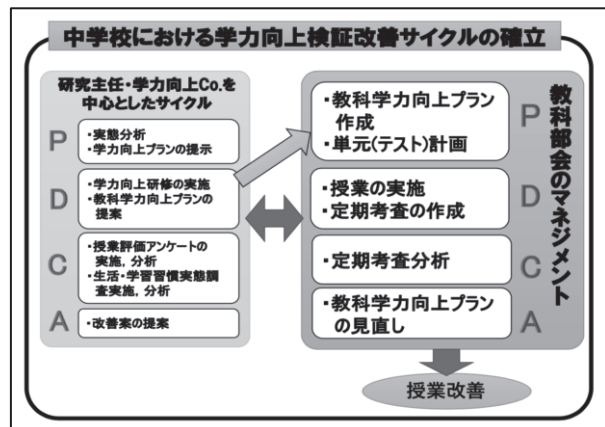


図3 教科部会のマネジメント

3 研究の目的

教科学力向上プランシートをもとに、教科部会のマネジメントを行うことを通して、中学校にお

ける学力向上検証改善サイクル確立の方法について究明する。

4 研究の仮説

教科学力向上プランシートを活用し、教科部会のPDCAサイクルを具現化するマネジメントを行えば、教科部会でテスト作成の改善や授業の改善が行われ、学力向上検証改善サイクル確立の方法を実証できるであろう。

5 仮説説明の具体的方策

教科学力向上プランシートをもとにした教科部会を以下のPDCAサイクルでマネジメントする。

(1) P段階：プランの共有

- ①学力向上研修で生徒の実態と重点課題を共有
- ②教科学力向上プランシートの作成

(2) D段階：授業の実施（1学期）

- ・問題交流のための教科部会の実施

(3) C，A段階から2学期のP段階へ

- ・学力向上研修後の教科部会の実施

(4) D段階：授業の実施（2学期）

- ・授業研に向けての教科部会の実施

(5) C，A段階から3学期のP段階へ

- ①データ共有のための学力向上研修の実施
- ②管理職を交えた教科部会の実施

6 研究の実際

(1) P段階：プランの共有

①学力向上研修で生徒の実態と重点課題を共有
PDCAサイクルに沿って、全体で課題を共有するための学力向上研修を5回計画した（図4）。

表1 第1回学力向上研修の概要

1	実施日	平成31年4月4日（木）8:45～9:30
2	ねらい	目指す学校像「学力保障・学力向上への安心」について確認し、教科部会で目指す生徒像について共有する。
3	内容	・2，3年生の学力実態について ・教科部会の機能について ・昨年度の数学科部会のPDCAサイクルの紹介
4	形式	全体研修

第1回は、P段階として年度始めに行った。今年度の重点目標である「基礎的な学力の定着と確実な伸びを実感できる生徒の育成」と目指す学校像の1つである「学力保障・学力向上への安心」を踏まえ、各教科で目指す生徒の姿を共有することをねらいとした。そのために、2，3年生の定期考査やアンケート等の分析結果を示し、定期考査と

研究主任，学力向上Co.の動きと教科部会へのマネジメント												
内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
検証改善サイクル		P	D	CA	P	D	CA	P	D	CA	P	D
研究主任・学力向上Co.の動き	分析，教科主への提案 ・4月分析結果分析 ・全国調査結果分析	学力向上研修等での報告，提案 ・第1回 ・学力向上研修4/4 ・2/3年生の学力向上 ・教科主への提案	教科主への提案 ・4月分析結果 ・5/3分析結果 ・4月分析結果 ・5/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果
教科部会			教科主への提案 ・4月分析結果 ・5/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果	教科主への提案 ・3/3分析結果 ・3/3分析結果
定期考査（授業）			期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について	期末考査問題作成 ・活用問題について

図4 研究主任，学力向上Co.の動きと教科部会へのマネジメント

の指導と評価の一体化を目指すことで授業改善のサイクルを回していくことを確認した。その例として，1年次の研究として，数学科部会で前年度3学期に行ったPDCAサイクルを紹介した。

年度始めに生徒の実態を示したので研修後の感想には「1年からの学力の変動を見ていくと多くの課題がわかった」という課題を見出す意見が上がった。また「目指す生徒の姿を共有し，その手だてをみんなで考えて共有していく大切さを改めて感じた」という組織的に取り組むことの大切さの意見もあった。学力向上研修会の際に，研修会の成果を図るために「授業に関するアンケート」を行った（全教員，4件法，N=38）。同アンケート調査は，授業改善を目的として，その時点の自分の授業に対する取り組み方を把握する目的で研修会後に実施している。結果としては，「指導計画を教科部会で共有している（2.26）」，「評価問題，テスト問題について教科部会で話し合っている（2.34）」の質問については評価が低かった。この時点では，全体の研修会を実施はできたが，各教科部会での情報共有・意識共有といった段階には至っていない可能性があることがわかった。

②教科学力向上プランシートの作成

学力向上研修会の後，管理職と課題を共有した上で，教務主幹に依頼して，時間割の中に教科部会を設定してもらうことで，国語科，社会科，数学科，英語科については時間を確保するようにした。理科部会は本学の理科教員全員が共通に空き時間を確保することができなかったため，教科部会を

設定することができなかった。英語科部会については，本年度・次年度に福岡県教委指定の「外国語」に関する研究発表会を抱えているため，部分的に学力向上のための教科部会に参画してもらうように配慮している。

教科部会の設定については，時間割上の工夫だけではなく，教科教員の持ち時間数や特別教室の利用も関係してくるため，なかなか設定しにくい状況があることが理解できた。

その時間を活用するための計画は表2の通りである。ここでは，国語科部会の教科学力向上プランシート作成について述べる（表3）。

表2 教科部会の計画（6月）

6月	教科部会 バグ	教科部会計画			
		国語	数学	社会	英語
3月					
4月	部会実施 (教科プランについて)				部会実施 (指導案，教科プラン)
5月					
6月	各学年4月の 分析入力 期末問題作成				
7月					
10月					
11月	部会実施 (期末問題交流)				各学年4月の 分析入力 期末問題作成
12月					部会実施 (指導案について)
13月	期末考査問題提出 (主幹へ)				教科学力向上プランについて 教科の先生と話す
14月	教科学力向上プラン 提出	教科学力向上 プラン提出	教科学力向上 プラン提出	教科学力向上 プラン提出	教科学力向上 プラン提出
17月					
18月	各自 活用問題の 分析	各自 活用問題の 分析	各自 活用問題の 分析		部会実施 (25日の指導案)
19月					
20月					
21月					
24月					
25月	部会実施 (期末分析交流)	正答率等報告書 提出	正答率等報告書 提出	正答率等報告書 提出	正答率等報告書 提出
26月					

表3 国語科部会の概要①

1	実施日	令和元年6月4日(火)3時限目
2	ねらい	4月の学力検査の結果をもとに、今年度の目標や取組指標、1学期の計画について話し合う。
3	参加者	国語科教諭4人、研究者

表4 国語科の教科学力向上プランシート(目標、指標)

本年度の(国語科)の重点目標	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 国語に関する理解を深め、正しく、豊かに自己表現する能力を身につけさせる。 ○ 日常的な指導を継続し、漢字力や語彙力を高めさせる。 ○ 文章を書かせたり、自分の意見を言わせたりする活動を設定することで新大学入試制度へ備える。 	
取組指標(P)	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元別漢字小テストを行う。 ○ 「書く」力を高める短作文指導を行う。 ○ 各単元の終末段階で「表現」させることをねらった単元計画を立てる。 ○ 自己評価を文章で表現させる。 ○ 表現する前に、自分の考えを書いてまとめる活動を取り入れる。 	

事前に国語科主任が表4のように目標を考えていたので、具体的な取組について、担当する学年や経験年数に関係なく、活発に意見を交換することができた。1年時に担当していなかった2年生を担当する教師が、昨年度にどのような取組をしたかを聞く機会にもなり、より高度なことに取り組めることを確認できていた(図5)。担当する学年だけでなく、3年間を見通した目標を共有するために教科部会は重要だと感じられた。

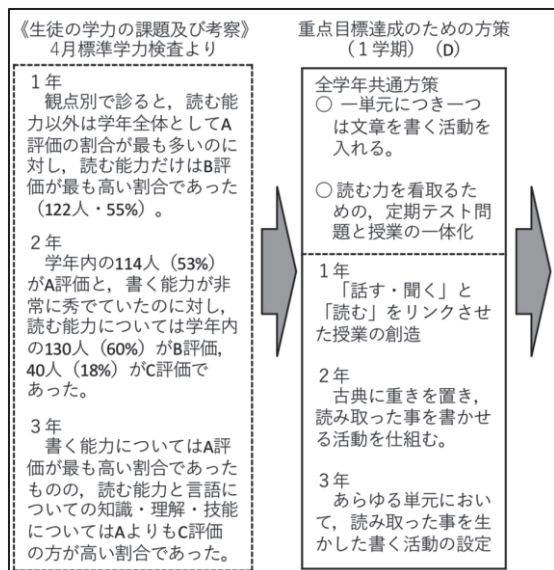


図5 国語科学力向上プランシート(分析、P段階)

数学科、社会科については、課題を話し合いながら一部を分担する形でプランシートを作成できた。理科、英語科については、部会の時間が確保できず、教科主任が中心となって作成したプランシートの紙上提案となった。

各教科部会の運営計画を立て、プランシートを作成することはできたが、初期体験であるため、教科部会の活動が生徒にどのような変化をもたらすのか、効果予測の見通しを十分に立てられずには判断しにくい状況であった。

(2) D段階：授業の実施(1学期)

・問題交流のための教科部会の実施

1学期期末考査前の教科部会の時間は、期末考査の活用問題について交流する時間とした。ここでは、時間を十分にとって行なった国語科部会について述べる(表5)。

表5 国語科部会の概要②

1	実施日	令和元年6月11日(火)2時限目
2	ねらい	期末考査(活用問題)についての交流
3	参加者	国語科教諭4人、研究者

活用問題を出題するにあたってどんな授業を行ったか、どんな意図で出題するのかを交流し、意見を出し合った。他学年から客観的な意見として、生徒の実態から見ると、難しすぎないかとの意見があったが、3年間でこだわってきたところなので、どのくらいできるか見たいという返答であった。部会后、初任者からの聞き取りでは、「他の学年の取組や問題作成の意図が聞けるので参考になる。(自分は2年だが1年生のとき受けもってなかった)1年生の時の取組を2年生にどうつないでいくかを考えられる。」という感想を聞くことができた。

他教科部会については、表2の通り期末考査の直前に問題交流のための部会を計画したが、出張や授業の入替え等で、社会科部会は実施できなかった。また、期末考査後の分析については、英語科の中間報告会等もあったため、授業の入替えで実施が難しく、それぞれの学年で活用問題の分析を行うことになった。単なる教科部会の設定、時間割に組み込むだけでは、十分な対応が取れていないと判断した。

また、問題交流のための部会の計画は、テストの直前であったため、評価場面を設定した上での単元計画(授業改善)につながらないという課題があった。そこで今後の対応策として、2学期の計画段階から、評価場面の中間考査問題を設定できるよう、次回は夏休み中に問題交流をするという計画を立てた。

(3) C、A段階から2学期のP段階へ

・学力向上研修後の教科部会の実施

表6 第3回学力向上研修の概要

1	実施日	令和元年8月6日(火)13:00~14:50
2	ねらい	全国調査の結果、各種アンケートの結果をもとに2学期のプランについて見直す
3	内容	<ul style="list-style-type: none"> ・全国調査結果、アンケート結果の共有 ・主題研に沿った授業改善について(研究主任より) ・部会での教科学力向上プランの見直しと中間考査問題交流、2学期の計画
4	形式	全体研修→教科部会

学力向上研修の第3回は、C段階として、全国調査の結果や生徒による授業評価アンケート結果等をもとに、改善策やプランの見直しをする研修を行った(表6)。アンケート分析結果からわかる課題を、研究主題に沿ってどのように授業で改善していくか研究主任が提案した。その後、教科部会で2学期のプランの見直し、中間考査問題の交流、今後の計画について話し合う時間を設定した。研修の感想は表7の通りである。

表7 第3回学力向上研修の感想

- ・データの分析から学ぶことがたくさんあり、今の夏休みだからこそじっくりと考え2学期に向けてより良いスタートが切れるようにしたい。
- ・教員が見直しをもってゴールの姿をイメージして(見据えて)授業することの大切さが改めてわかった。
- ・生徒にどんな力をつけようとするのか、授業ねらう内容をしっかり意識して計画していきたい。

後日、各教科に学力向上プランシートに話し合ったことを記入して提出してもらった。図6は図5に続く国語科学力向上プランシートである。

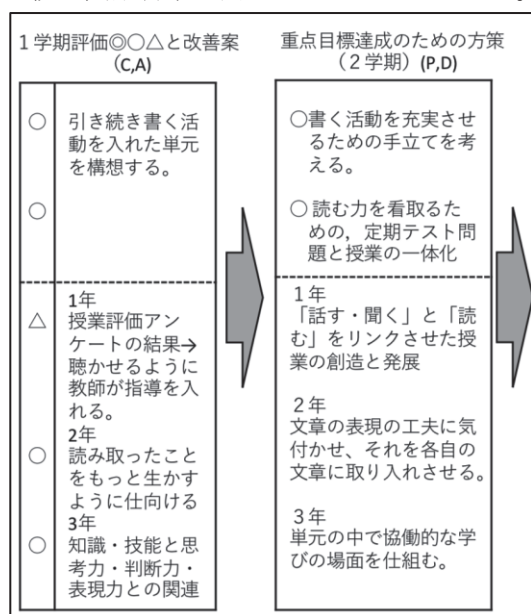


図6 国語科学力向上プランシート (C, AからPへ)

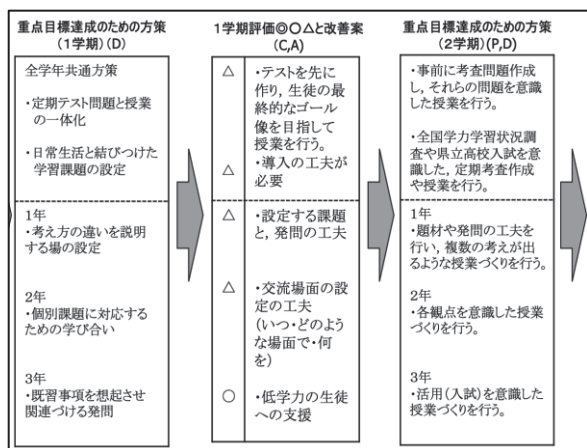


図7 数学科科学力向上プランシート (C, AからPへ)

図7は数学科の教科学力向上プランシートである。1学期の方策の評価が△が多く、授業と評価の一体化の重要性を意識しながらも、単元を見通してどのような力をつけていくかは、担当する学年同士の日常の会話で共有するにとどまっていることが考えられる。2学期の方策は少し具体化されたものの、それを教科部会全体で自律的に取り組むまでには至っていない。教科部会のPDCAサイクルを回すためには、C段階を教科部会だけに任せず、管理職や主幹教諭、研究主任、学力向上Co.と交えた場を設定し、プランや方策の見直しを強化していく必要がある。

(4) D段階：授業の実施(2学期)

・授業研に向けての教科部会の実施

主題研に沿った授業研を2学期中に行うという提案が研究部から出されているので、その予定に沿って教科部会を計画した。国語科部会は表8のように部会を実施することができた。

表8 国語科部会の概要③

実施日	内容	参加者(部員4名)
10月30日	A教諭指導案検討	部員3名, 研究者
11月6日	B教諭指導案検討	部員3名, 研究者
11月13日	A教諭授業研振り返り	部員3名, 研究者
12月11日	B教諭授業研振り返り C教諭指導案検討	部員3名, 研究者 教頭, 大学教授

A教諭の1年生の指導案は、11月の期末考査で行われる糸島市共通問題を評価場面に設定した単元計画となっており、生徒の実態に合わせた指導過程で意見交流が行われた。また、3年間を見通して1年生の段階ではどんなことが必要かを考えた意見も出た。B教諭の3年生の指導案は、生徒も苦手とする和歌の単元で、過去の入試問題を評価場面に設定した計画が提案された。部会後のアンケートでは「アドバイスをもらい悩んでいたことがすっきりした。」「先輩からのアドバイスをもらえるのは大変ありがたい。」などの記述があった。B教諭の授業研の振り返りの会では、授業の手だての課題を出しつつ、生徒が単元を通して学んだ姿から、和歌の授業改善の提案となったと評価し合うことができた。

他教科も同じように授業研の日程に合わせた教科部会の実施を促したが、授業研の日程が定まらない、出張や授業の入替え等で人数が揃わない等の理由で国語科のように計画的な実施ができなかった。また、研究主任は、11月に行われる研究発表会の準備もあり、授業研の日程調整等、教科部会との連携に課題があった。

(5) C, A段階から3学期のP段階へ
①データ共有のための学力向上研修の実施
教科部会でC段階に入る前に、全体でデータや評価の視点を共有するために、学力向上研修を実施した(表9)。

表9 第4回学力向上研修の概要

1 実施日	令和元年12月10日(火)16:30~16:50
2 ねらい	生徒の実態や2学期の取組を振り返り、本年度の重点課題の達成度を評価する
3 内容	・定期考査、県の学力調査の結果の共有 ・アンケートの結果共有 ・2学期の教科部会の取組から
4 形式	全体研修

本年度の重点目標「基礎的な学力の定着と確実な伸びを実感できる生徒の育成」の達成ができたか、生徒の実態をデータで示して各自で考えてもらった。また、2学期期末考査に5教科で実施された糸島市共通問題の取組について触れ、指導と評価の一体化を目指す定期考査の意義についても確認した。
②管理職を交えた教科部会の実施
2学期のC段階の教科部会は、1学期の課題を反映し、より充実した評価・改善となるよう、管理職に同席してもらい実施した(表10)。

表10 2学期C段階の教科部会の日程と参加者

日	時	教科(部員数)	参加者
12月10日	5時限目	英語科(8)	部員8名, 校長
12月11日	4時限目	社会科(4)	部員3名, 教頭, 大学教授, 研究者
12月12日	6時限目	数学科(7)	部員5名, 校長, 教頭, 研究者
12月18日	3時限目	国語科(4)	部員3名, 研究者

数科学力向上プランをもとに学期初めに計画した授業を行うことができたか、糸島市共通問題も含め、評価場面を設定した単元構成の工夫ができたかを評価し、改善策を話し合う時間であった。学力向上研修で得たデータをもとに、それぞれの2学期の取組を共有し、目指す生徒像や具体的な課題を改めて確認することができた。数学科部会では、管理職に入ってもらったことで、「他教科の観点からもアドバイスがあり、3学期に取り組むべき方向性を示してもらったことができた」という感想もあった。研修後のアンケートでは、「若い先生から学ぶことも多く、自分の授業を見直すきっかけとなった」と授業改善に向かう感想もあった。教頭から「何を学んだかじっくり振り返る時間をとる」という話があり、一方で、基礎・基本の定着をどのように行うか、各学年の取組を交流した上で、単元構成をどのように行うかを話し合い、改善案としてプランシートに記入していった。

国語科部会では、2学期の初めに数科学力向上プランシートに計画して書いた内容が曖昧だったことを反省し、3学期の改善案を具体的にどの単元で、どんな活動をするかまで出すことができた。また本校の課題である「書く力」についてはどの単元でもこだわり、学年の実態に応じた設定で、3学期の計画につなげることができた(図8)。

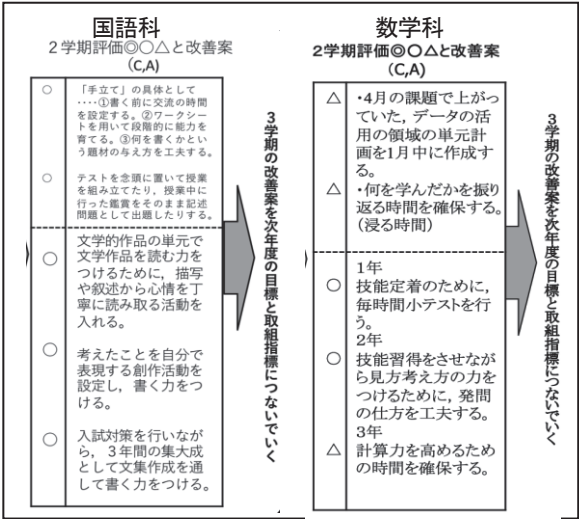


図8 国語科、数学科学力向上プランシート(A段階)

7 全体考察

(1)授業に関するアンケート
平成31年4月の学力向上研修後に行った「授業に関するアンケート」を令和元年12月の学力向上研修後にも行った。その結果は表11の通りである。

表11 授業に関するアンケート結果(4件法)

	国語科		数学科		社会科		理科		英語科	
	H31.4	R1.12	H31.4	R1.12	H31.4	R1.12	H31.4	R1.12	H31.4	R1.12
使命感、熱意、感性	2.9	2.6	3.1	3.1	3.0	3.3	3.0	3.2	3.3	3.4
児童・生徒理解	2.8	2.5	3.0	3.1	2.8	3.0	2.6	2.6	3.0	3.0
統率力	2.8	2.1	3.1	3.0	3.0	3.1	3.0	3.1	3.0	3.2
指導技術	2.6	2.5	2.9	2.7	2.8	3.1	2.9	2.8	2.9	3.1
教材開発教材解釈	2.8	2.8	2.9	2.5	3.0	3.1	2.8	3.0	2.9	2.9
「指導と評価の計画」の作成・改善	2.3	2.4	2.4	2.7	2.6	2.4	2.4	2.9	2.8	2.8
教科部会	2.3	2.1	2.6	3.0	2.3	2.1	2.3	2.1	2.1	2.4
	N=4		N=7		N=4		N=5		N=7	

「教材解釈、教材開発」「指導技術」、「指導と評価の計画の作成・改善」「統率力」「使命感、熱意、感性」、「生徒理解」の6つの構成要素に組織的な取組として「教科部会」を加え、4月と12月を比較した。国語科は、4月に比べ、12月の結果が低くなっている要素が多い。国語科は、1学期から2学期にかけて、計画的に教科部会を実施したが、授業の評価は下がっている。小項目を見ると、「評価問題、テスト問題について教科部会で話し合っている」という項目は若干上がっているものの、「学習内容や計画、方法等の共有」という項目は下がっ

ている。社会科部会も同様で、教科学力向上プランシートを使って目標共有していても、「学習内容や計画、方法等の共有」の項目は低い。一方で、数学科は、「教科部会」や「指導と評価の計画の作成、改善」の要素が上がっている。複数の教師で学年を受けもつことも多く、定期考査問題を作成するときだけでなく、日常から学年担当の教師同士で授業計画や時数等を共有しているという実態もある。英語科部会については、福岡県教委指定の「外国語」に関する研究もあり、計画の共有や指導案審議で密に教科部会が行われた結果がアンケートに現れている。

これらのことから、一部の教科部会では「指導と評価の一体化」が議論されるようになっているが、それを教科部会で責任をもつという、「教科部会の運営の見通し」までは十分に共有されていないという実態があることがわかる。

(2)教科部会アンケート

今年度2学期に行った教科部会後には、教科部会の意義を確認してもらうために、アンケートを記入してもらった。ここでは、計画的に部会を実施できた上に、アンケートの回収率が高かった国語科部会の活動を事例として述べる（表12）。

表 12 国語科教科部会アンケート結果（4件法）

国語科	N=4	N=3	N=3	N=3	N=3
	9月12日	10月30日	11月6日	11月13日	12月18日
教科の課題やビジョンについて共有できた。	3.5	3.3	3.0	3.3	3.7
教科部会の中で、積極的に意見を出すことができた。	3.3	3.0	3.0	3.3	3.3
今後の動きや授業改善の見通しをもつことができた。	3.3	3.0	3.3	4.0	3.3
教科部会の一員として、自分に何ができるのか考えることができた。	3.3	3.3	2.3	3.3	3.3
他の先生の取組や意見から学ぶことができた。	3.5	3.7	3.3	4.0	3.7
内容→	1学期 プラン 見直し	A先生 指導案 検討	B先生 指導案 検討	A先生 授業研 振返り	2学期 プラン 見直し

国語科の通常学級を指導しているのは、非常勤講師も含めると5人であるが、教科部会は4人の教諭で行っている。初任者の出張や授業の入替え等で誰かが欠けているということが多かった。国語科以外の教科も同じく、教科部会の時間が設定してあっても全員が揃わないことが多く、実施できずに紙上提案や個人作業になってしまうことがあった。国語科は、研究者が提案していた教科部会の計画をもとに、主任が事前に声をかけて下準備をして部会に臨んでいたもので、計画的に行うことができた。また、国語科部会が設定された時間に研究者（数学科）が参加できる環境にあり、教科をつなぐ役割も果たすことができた。特に、PDCAサイクルのC段階、教科学力向上プランの見直しを行ったときは、課題やプランの共有についての項目の評価が高い。2学期のプラン見直しの時には、計画していた改善の手だてが曖昧だったこと

に気づき、3学期の具体的なプランにつなぐことができた。

これらのことから、教科学力向上プランシートを使った教科部会のマネジメントはPDCAサイクルを回すのに効果があったと考えられる。

8 成果と課題

【成果】

- 教科部会を中核とした学力向上PDCAサイクルを確立することができた。
- 教科部会が作成した教科学力向上プランシートを活用することで、一部の教科部会においては学力向上に対する授業改善、取組の共有化を図ることができた。
- 教科部会を推進するためには、各教科部会・教員の自律性に委ねる手法も重要ではあるが、教科部会・運営が課題となる場合、管理職の指導を検討することも有効な手法である。

【課題】

- 教科部会において、各教員の学力向上に対する個人的認知の差を変容させる手法を十分に対応（指導）することができなかった
- 学力向上に向けた教科部会の自律的な運営のメカニズムをより精緻に分析できなかった。研究テーマの残された重要課題である。

主な引用・参考文献

- 文部科学省 2007 「学力調査の結果に基づく検証改善サイクルの確立に向けた実践研究」
- 文部科学省 2007 学校改善支援プラン作成等事業
- 文部科学省 2007 学校改善支援促進事業
- 福岡県教育委員会 2018 福岡県教育施策実施計画
- 糸島市教育委員会 2018 糸島市学力向上プラン
- 福岡県教育センター 平成29年度研究「実効性のある検証改善サイクルによる学力向上」
- 糸島市教科等研究協議会数学科部会 2018「主体的・対話的で深い学びを実現する数学科学習指導法の研究」
- 国立教育政策研究所 2018 全国学力・学習状況調査 学校質問紙
- 東京都教職員研修センター 2005 「学力向上を図るための指導に関する研究」

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研修機会を与えていただき、ご支援いただいた福岡県教育委員会、糸島市教育委員会に感謝申し上げます。また、在籍校の校長先生をはじめ、協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。